

雀居 12

—雀居遺跡第20次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1360集

2019

福岡市教育委員会

SASA I
雀居 12

—雀居遺跡第20次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1360集



遺跡番号 SAS-20
調査番号 1718

2019

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では弥生時代から中世にかけての水田遺構を検出しました。国内最古の水田遺構が発見された板付遺跡とも近く、また、中世においては皇室領とも関連した「博太庄」付近と考えられ、注目されるところです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで株式会社バージョングループをはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成29年度に自動車展示場建設に伴い、福岡市博多区東那珂2丁目641-3、642-2、645-2地内で実施した雀居遺跡第20次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、藤野が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は荒牧、平川敬治、浄書は荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用していく予定である。

凡 例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、土壌をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II	位置と環境	1
1.	地形と周辺遺跡	1
2.	条里地割について	1
3.	雀居遺跡の既往調査成果	2
4.	博太庄について	2
III	調査の記録	4
1.	調査の概要	4
2.	調査区の設定	4
3.	基本層序	4
4.	遺構と遺物	5
(1)	第1面の調査	5
	土壙 畦畔 SD01 方形状の高まり SX101	
(2)	第2面の調査	8
	SD11 SD16 土堤12 水口14 SD13・SD103 SD18 SD22・23 SX19 畦畔20 SX25	
(3)	第3面の調査	13
	SD28 SX27	
(4)	第20次出土遺物	14
IV	おわりに	見返し

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市博多区東那珂2丁目641-3、642-2、645-2における自動車展示場建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成29年6月12日付で受理した。これを受けた文化財部埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である雀居遺跡の隣接地に位置していることから試掘調査を同年6月29日に実施した。試掘調査では客土を取り除いた現地表面下150cm以下に2面の水田面が確認されたことから遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、株式会社バージョングループを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。統いてこの契約に従い発掘調査を同年8月18日から10月20日まで実施し、平成30年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

平成29年度の発掘調査、および30年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財課 課長 常松 幹雄（29年度）

文化財活用部埋蔵文化財課 課長 大庭 康時（30年度）

調査第2係長 大塚 紀宜（29・30年度）

【庶務】 文化財保護課管理調整係 松原加奈枝（29年度）

文化財活用課管理調整係 松尾 智仁（30年度）

【事前審査】 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（29・30年度）

主任文化財主事 池田 祐司（29年度）

田上勇一郎（30年度）

文化財主事 中尾 祐太（29年度）

朝岡 俊也（30年度）

II 位置と環境

1. 地形と周辺遺跡

福岡平野を形成する御笠川下流域の右岸に位置する。周辺は広く水田が形成されてきた沖積地である。近辺の調査では福岡空港内の雀居遺跡や下月限C遺跡において、低地では古代～中世の水田面、沖積微高地では弥生前期～古墳前期の集落跡が検出されている。御笠川左岸域では弥生早期（夜臼式期）の水田跡で著名な国史跡板付遺跡や那珂君体遺跡などにおいて、弥生や中世の水田跡が検出されている。さらに博多湾に向かって細長く残る中位段丘面には諸岡遺跡、板付遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡など弥生から現代まで連続と続く集落が形成されている。

2. 条里地割について

席田郡の条里地割は日野氏によって復元されている。（2007年野尚志「下月限C遺跡を中心にして条里・河川について考える」『下月限C遺跡VII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第932集）論文に依拠すると調査地点は七図三里三坪に位置し、雀居遺跡第6次調査地点は六図三里卅坪にあたり、下記の第4項の係争地になる。また、本調査地点の西側水路は昭和初期の地形図（Fig.3）にみられるように幹線水路として現在まで継承されているが、日野氏は旧河川流路の利用としてとらえ、（2007年

野 前掲第6図のK-N) 本調査でも確認された。

3. 雀居遺跡の既往調査成果

空港内の雀居遺跡は1991年(平成3年)より試掘トレンチ調査による第1次調査を開始し、本報告の調査で20次を数える。

北側の国際線ターミナルと駐機場の部分(2、3、6、8、11次)では1~2面の調査が行われた。第1面からは10~11世紀代の集落跡、第2面からは9世紀前後の水田跡と溝が検出された。出土遺物には墨書き土器や木簡(第2次)も含まれる。

南側の7、9、10、12、13、14次調査では上記北側調査の第2面に相当する古代の水田面(第1面)と主に弥生時代終末~古墳初頭が中心となった集落(第2面)、弥生早期から中期前半が中心となった集落(第3面)が検出された。古代の水田面は10、12次地点中央部では畦畔等の遺存状況が良いが、周辺部では検出が困難となる。出土遺物には大型の人形(第12次)、斎串、墨書き土器なども出土した。

第2面と第3面を層位的に判別するのは難しいが、遺構、遺物量から大きく分かれるようである。

前者の弥生終末から古墳初頭にかけての集落は東側の7、9次調査地点と西側の10、12、13次調査地点に分かれ。堅穴住居跡も検出され、それぞれの集落の周縁部には夥しい量の土器溜りがみられた。遺物中には吉備系、山陰系などの外来系土器も含み、そうした状況は南側の下月隈C遺跡調査でもみられる。なお、雀居遺跡第4次調査や下月隈C遺跡4、7次では楽浪系土器も出土した。

遡った弥生早期~中期前半では東側の7、9次で甕棺墓や、土壙墓が東側に寄って検出された。また、西側の10、12、13次調査でも甕棺墓や木棺墓、土壙墓が検出され、集団を異にしていると思われる。同時期の遺構として第12次調査地点では家畜小屋の可能性が指摘されている円形周溝も検出された。

既往調査の中では南端に位置した第4次、5次調査では弥生時代集落の中心部分が検出された。後期では環濠とその内部から大型掘立柱建物が検出された。環濠中には彷彿鏡、木製短甲、盾、組合式案(机)など重要な遺物が含まれていた。早期~前期の溝からも完形品を多く含む木製の農具や織機が出土した。

このように、既往の調査では古代の水田跡、中世前半期の集落とともに弥生時代の「奴国」を構成する中核的な集落が発見してきた。特に後者については現在では分かりにくい沖積微高地に弥生時代早期から前期と弥生後期~古墳初頭にかけて大きく発展している状況がうかがえる。

4. 博太庄について

貞觀9(687)年の史料(平安遺文154号)から席田郡内において仁明天皇皇女高子内親王家庄と観世音寺領が錯綜し領有をめぐって相論が起つたことが知れる。この係争地は日野尚志氏により福岡空港内の北側調査地点(3、6、8、11次)から東側にかけての領域に比定されている。(下月隈C遺跡VII p-255第6図)高子内親王家庄は二十八町三段余としていることから(平安遺文157号)から係争地周辺にも広がっていたと思われる。この高子内親王家庄は後に内藏寮領となり博太庄とよばれるようになっている。(平安遺文160号)この一帯が皇室領に結び付いていたことを示す資料として下月隈C遺跡第7次調査で出土した下限が8世紀後半におさえられる「皇后宮職」が書かれた木簡が挙げられる。(2006 坂上康俊「第7次調査出土「皇后宮職」木簡について」『下月隈C遺跡VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集)

2項で既述した木簡、大型人形、斎串、墨書き土器等は皇室、内藏寮、観世音寺領地に關係した役人による祭祀行為で用いられたのであろう。



Fig. 1 雀居遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)



Fig. 2 雀居遺跡既往調査地点 (1/8,000)

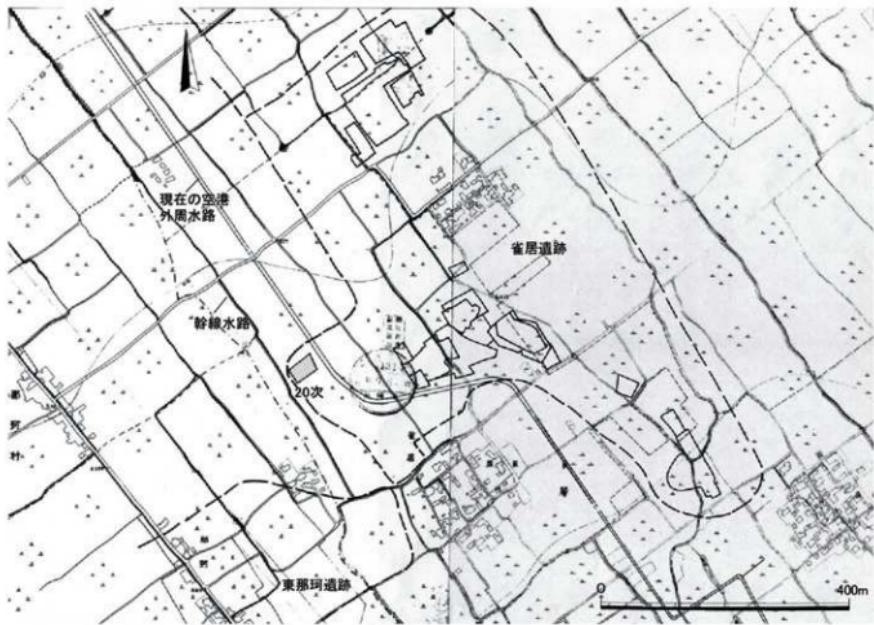


Fig. 3 雀居遺跡地形図（昭和初期）(1/8,000)

III 調査の記録

1. 調査の概要

3面の水田面が検出された。第1面は中世後半期以降、近世、近代まで含む可能性がある。土壌、畔溝等が検出された。第2面は中世12世紀以降と考えられるが、下層に古代に遡るとみられる水路も検出された。水田面の全域に砂層が厚く堆積し、遺構がよく残る。基幹水路、畔等が検出された。第3面は3区のみで検出された。土壌や溝などの水田施設が検出されたが時期を比定するのは難しい。弥生後期から古墳時代の範囲内には収まるであろう。

調査地周辺は遺跡包蔵地の隣接地に位置していたが、遺跡の範囲がさらに広がることが予想される。

2. 調査区の設定 (Fig. 5)

調査地は建設予定地の敷地南半部分である。調査はその予定地を3分割し、廃土を反転しながら西側の1区から進めた。

3. 基本層序

第1面 (Fig. 6)

厚さ130～160cmのクラッシャーと客土下に現代の水田土壌が約10cm堆積する。その下部が酸化鉄集積層の黄色粘土からなる床土となり、さらに下層が粗砂やシルトを多く含む灰色砂質土(15、18層)が堆積し、砂質部分を掘り下げ、粘土層となった20層を第1面とした。標高は5.25m前後である。東側の2、3区は第1面を覆う砂層が薄くなり、この面の調査は第1区のみ行った。

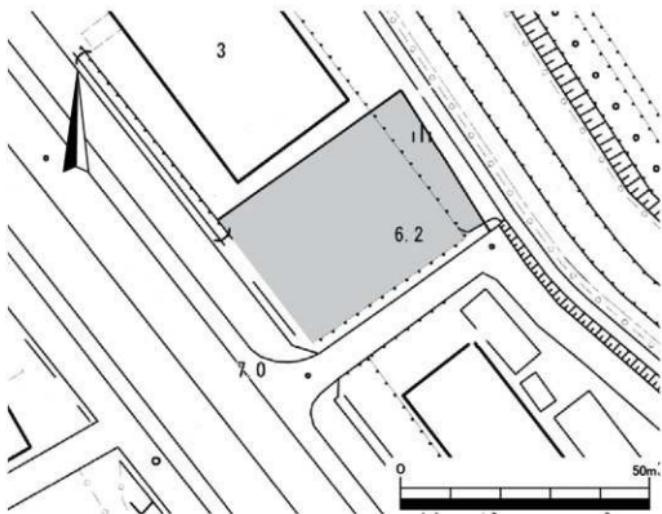


Fig. 4 鶴居遺跡第20次調査地点位置図 (1/1,000) ※アミ部は開発敷地全体

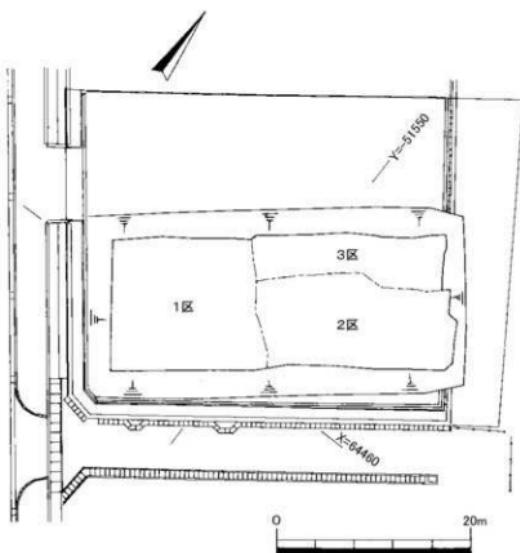


Fig. 5 鶴居遺跡第20次調査区 (1/500)

第2面 (Fig.11、12)

Fig.11の第1面とした8層黒灰粘土を掘り下げ、ラミナ状に堆積した11~18層の砂層を除去し、水田面19層の第2面を検出した。標高4.55m前後である。東側の2、3区ではFig.12B-B'にみられる16層のように第2面を覆う砂層が厚く、水田面の遺存がよい。1区~3区のレベルはほぼ変わらない。

第3面 (Fig.13)

水田構造は3区のみで検出された。図示したFig.13⑧土層図のように第2面下部を約50cm掘り下げると、層厚が約10cmの黒色粗砂層があらわれ、その下層の黒色砂質土層の上面を第3面とした。標高3.85m前後である。

4. 遺構と遺物

(1) 第1面の調査

1区のみで検出した。土壤10基、畔溝1基、性格不明の方形の高まり等が検出された土壤 (Fig. 8 Ph. 7)

土壤は底土より下層から掘りこまれているが、第1面の水田面を覆う洪水砂を切っているので、水田面より新しい。東側に径1.5m

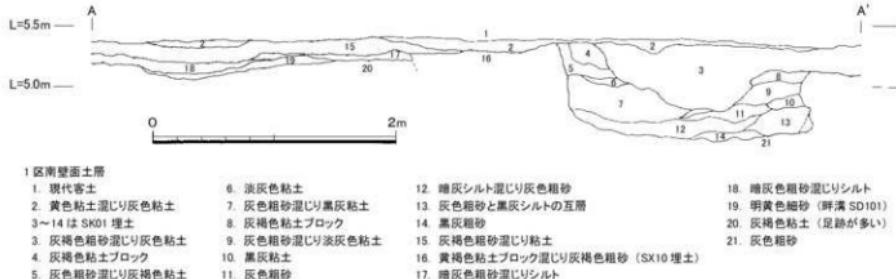


Fig. 6 1区第1面土層図 (1/40)

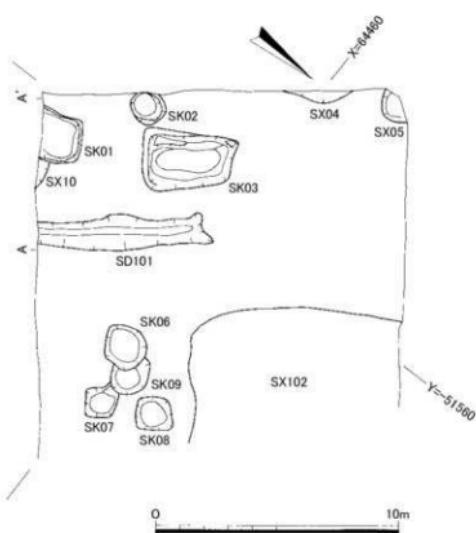


Fig. 7 1区第1面遺構全体図 (1/200)

前後の略方形プランの土壤が集中する。西側では短軸長が約2.5mの大型土壤 SK03 と SK01 が対列している。

小型の土壤は径1.5m 前後を測る隅丸の正方形に近いプランである。深さは50cm 前後である。埋土の最下や中層にラミナ状の砂層がみられ、水の流入を示す。SK02 と SX05 に埋められたような水平堆積の大きな単位がみられる他は、漸次、埋まっていたレンズ状の堆積に近い。

Fig.15の1は SX04出土の同安窯系青磁の小瓶である。2は SX09出土の陶器片である。外面はアズキ色の赤褐色を呈し、上部に縦位、下部に横位の細かいハケメが残る。内面は灰色を呈し、白色の細かい砂粒が浮き出ている。横位の細かいハケメと条線が1条みられる。中世末以降の時期か。

大型の SK03 は短軸長2.3m、長い南北辺は3.5m を測る歪な長方形プランを呈す。底面は船底状となり、下層の粗

砂層に達している。SK01も位置や形状から同様の規模となる可能性がある。

畔溝 SD101 (Fig. 6, 7 Ph. 6)

SD101は延長7mまで検出できた。東側に褐色化した土層が帶状に併行して延長することから、この部分が畦畔と考えられる。断面形の立ち上がりは Fig. 6 の19層にみられるように不明瞭である。

方形状の高まり SX102

北東部の SX102は上部に砂層が堆積せず暗黒灰色粘土が方形に分布していた部分である。第2面

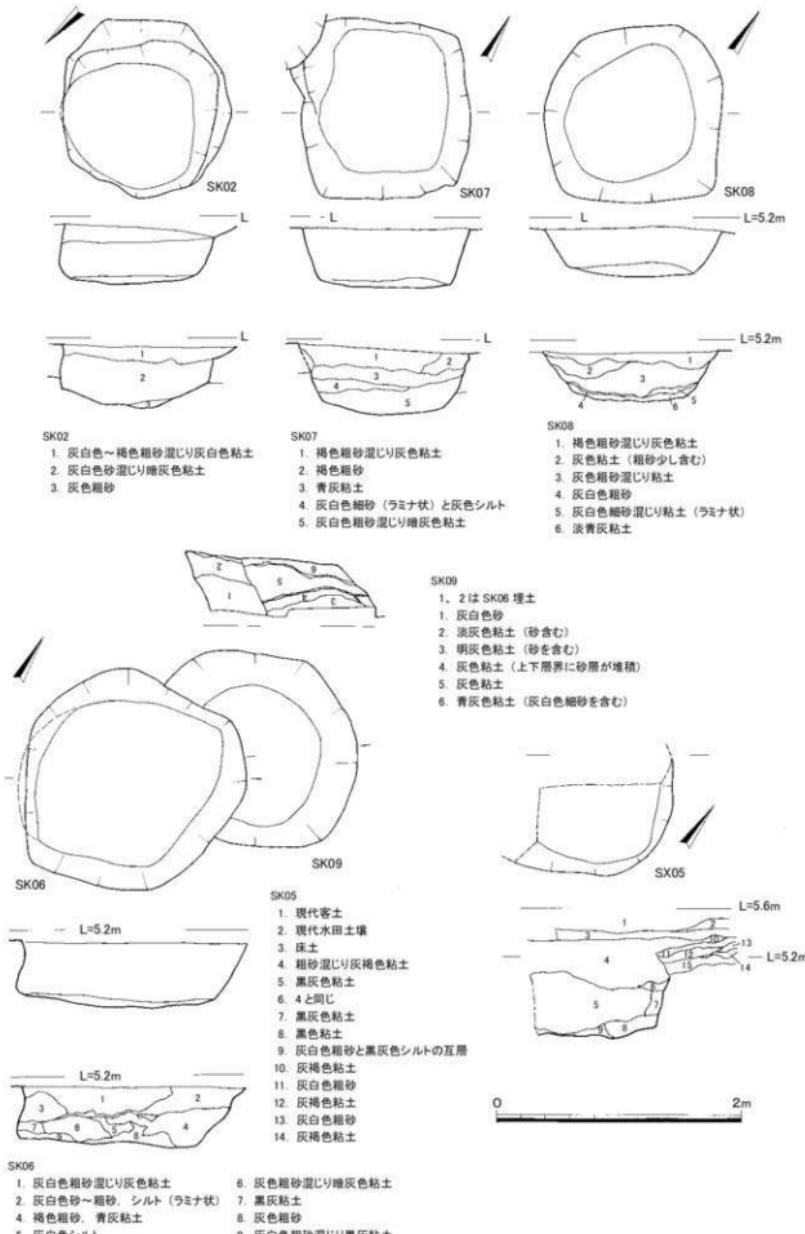


Fig. 8 1区第1面遺構実測図1 (1/40)

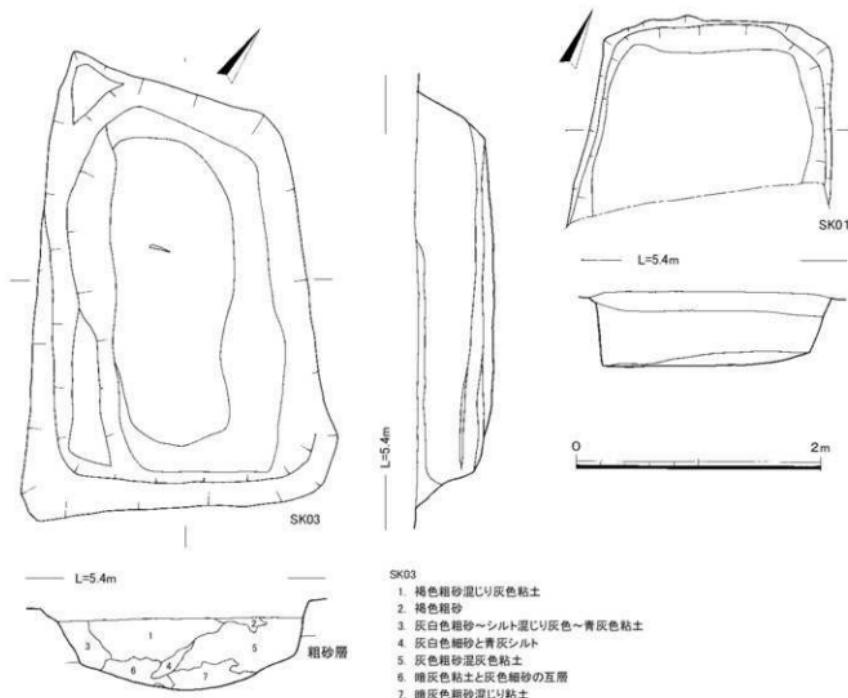


Fig. 9 1区第1面造構実測図2 (1/40)

の砂層まで掘り下げたが、本来は高まりがあったことから洪水砂が被らなかった部分と解釈できる。

(2) 第2面の調査 (Fig.10 Ph.8, 12, 14)

全面に洪水砂が厚く被り、水田造構を明確に捉えることができた。標高は4.55m前後を測り、調査区内では傾斜はほとんど無い。検出した造構は流路（幹線水路）1条、溝4条、土堤1、畦畔1である。

出土遺物 Fig.15の11～13は2区2面を検出中に出土した。11は須恵器の壺蓋である。12は須恵器の壺口縁部と思われる。器胎が薄い。13は土師器の壺である。XⅠ期前後（11世紀代）と思われる。

SD11 (Fig.11 Ph.9)

条里方向の調査区の西辺に沿って直線的に延長する流路である。下底からは蛇行する古い流路のSD16が検出された。東岸とそこに併行した土堤12は検出できたが、西岸は調査区外となるため、幅6m以上の規模は不明である。埋土の大半を砂層が占めることから洪水により短期に埋没したものとみられる。

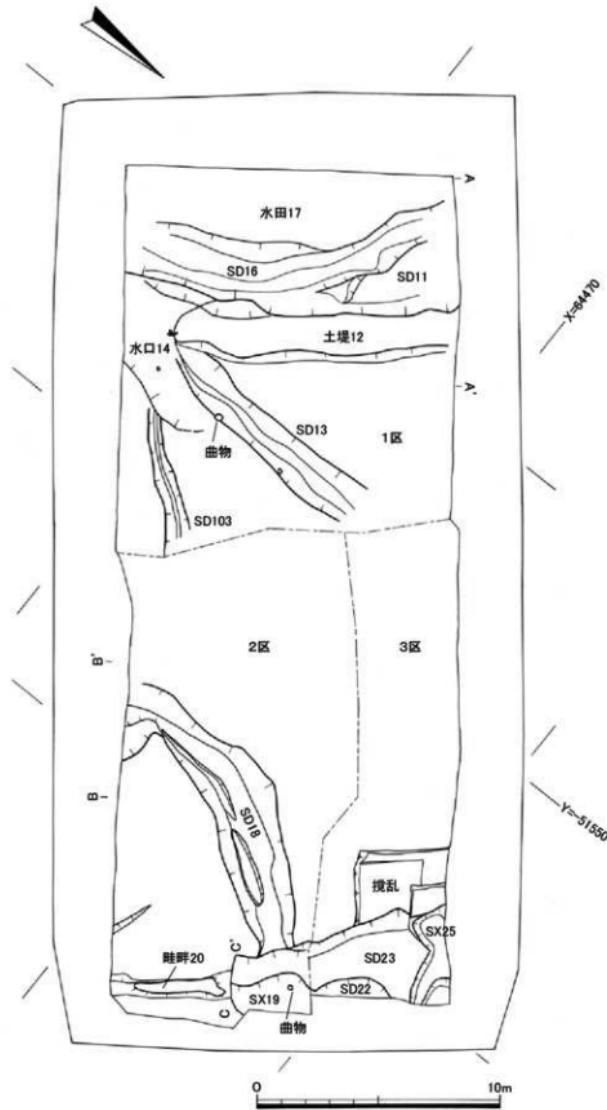


Fig. 10 1 ~ 3区第2面遺構全体図 (1/200)

水田17とした西側の底面は青灰粘土の平坦面を呈し、搅拌、侵食しながら流水したこととを示す小円形プランの砂が埋まつた凸凹がみられる。第2面レベルからの深さは約0.8mである。

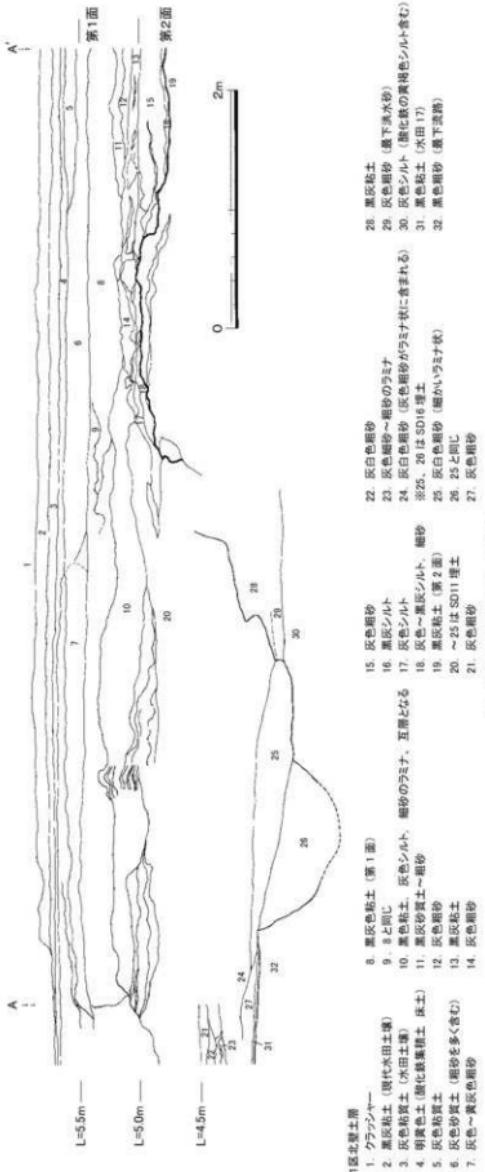
出土遺物 Fig.15の3は土師器壺である。復元口径12.6cmを測る。底部はへラ切りである。体部は湾曲し、端部は外反する。X II期(12世紀代)までの時期に収まると思われる。

SD16 (Fig.11)

SD11の下底からは湾曲した流路SD16が検出された。上部のSD11東岸に接して湾曲し、北側の土堤12への立ち上がりは不明瞭であるが、幅1.5~2.1mを測る。深さはSD11の下底である水田17から0.7mを測る。埋土には砂層が堆積する。下底のレベルは延長11mで約30cmの比高差で北側へ低くなる。このSD16を改修して基幹水路SD11を整備したものと考えられる。

土堤12 (Fig.11)

SD11の東岸に基底幅250cm、遺存する高さ25cmの規模の土堤が検出された。砂混じ



りの灰色の砂質土によって構築され、上部は Fig.11 の14層まで砂層と粘土の互層からなるミナからなるが、両脇の砂層と異なることから、このレベルまで修復された土堤が遺存している可能性がある。南隣は SD13、SD103と合流し、決壊している。この部分を水口 SX14とした。

水口14 (Ph.8)

調査区南西隅の土堤12が流失した位置である、東側の SD13と SD103が合流している。下降していく北側への取水口ともみられるが、調査区外の南側にも溝が検出され放射状となつた場合、ふけ田（水はけが悪い水田）の排水口の可能性もある。

底面は搅拌を受け起伏が大きい。杭が2本検出され、土堤12や水口の護岸が施されていたものと考えられる。近辺から祭祀に伴うとみられる曲物が出土した。

SD13・SD103 (Ph.13)

水口14から北側ないし北東方向へ延長している。SD13は幅2.0m、SD103は0.7～1.0mを測り、水口14にかけて細くなる。深さは SD13が約10cm、SD103が約5cm程度で、下底のレベルは水口14の方に下がっていくことから、ふけ田（水はけが悪い水田）に設けられた排水溝の可能性がある。

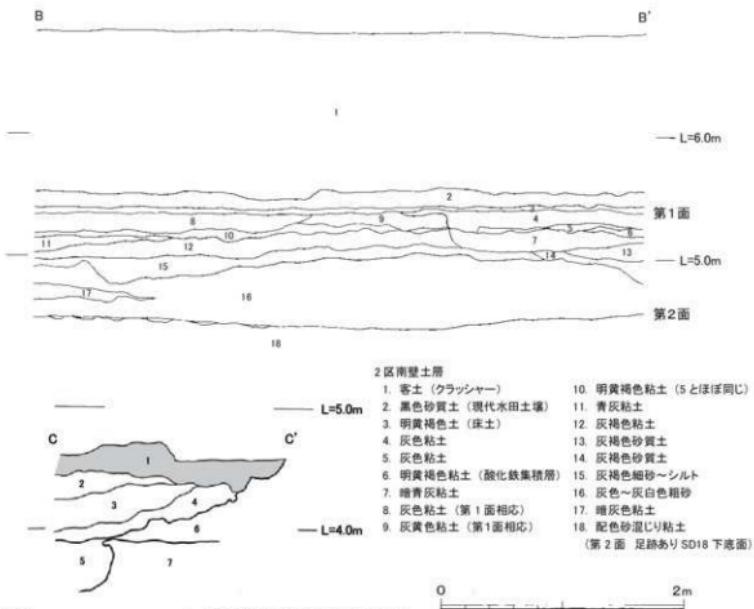


Fig. 12 第2面土層図 (1/40)



Ph. 1 SD13 出土曲物出土状況



Ph. 2 SX19 出土曲物出土状況

出土遺物 Fig.15の4はSD13の北端近くで出土した。水口14際で出土した曲物(Ph.1)と同様に祭祀に伴う可能性があるが、原位置を移動していると思われる。完形の手捏土器で口径2.8cmを測る。

SD18 (Ph.12)

調査区南東部(2区)で検出された。幅1.5~2.7m、深さ6~20cmを測り、大きく蛇行しながら延長していく。南側は流失し肩が不明瞭となっている。(Fig.12-18層の上面)下底のレベルは東側のSX19にむけて下がり、排水されたことがわかる。

出土遺物 Fig.15は土師器梶の高台である。XII期(12世紀前半)前後か。

SD22・23 (Ph.15)

SD23は2、3区の調査区東際で検出された。条里方向より西側に8°振れて、調査区内ではやや蛇行しながら延長していく。南側は Fig.12C-C' に図示した1層の畦畔20の下層である2層以下に

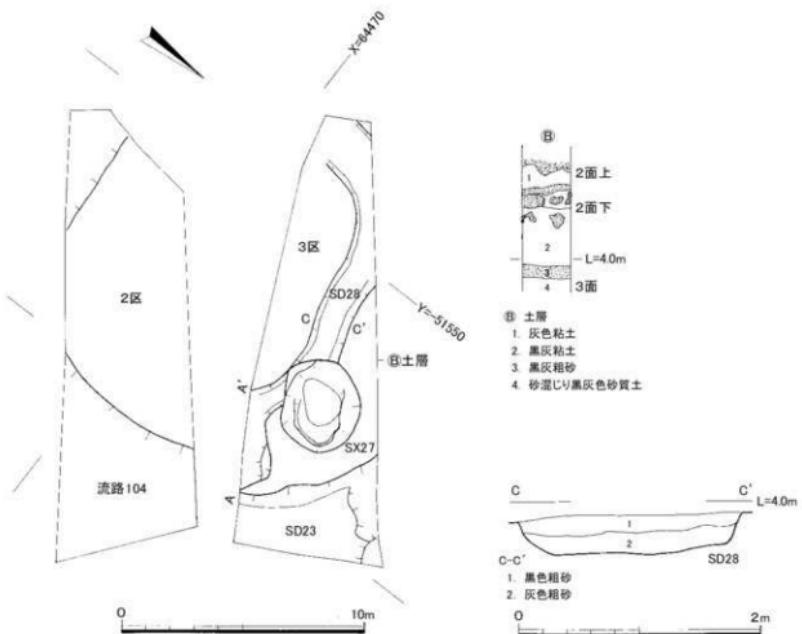


Fig. 13 2、3区第3面造構全体図 (1/200), 第3面土層図, SD28土層断面図 (1/40)

延長とみられる砂層の堆積が観察された。内側には出入りが著しいSD22が2段目の掘り込みとなつて検出された (Fig.12C-C' 5層)。SD18との合流部は排水口の急な落ち込み (SX19) となる。

出土遺物 Fig.15 の 6、7 は畦畔20の下層に堆積した砂層 SD21から出土した。SD21は SD23の延長であろう。6 の土師器坏は体部が薄く、内溝して立ち上がる。7 は須恵器坏の高台である。体部との屈曲より内側に高台が付く。9 は畦畔20下層の灰色粘土から出土した土師器甕である。10は SD22から出土した弥生土器の蓋である。

SX19

2 区の東際で検出された SD18と SD22の合流した排水口である。攪拌を受け灰白色砂が深く流入している。上層からは祭祀に伴うとみられる曲物 (Ph. 2) が出土した。

畦畔20 (Ph.13)

2 区の南東際で検出された。調査区内の延長約 5 mでは条里方向に構築されている。土堤12とは中心間で27.0m (1/4町) を測る。幅80cm、高さ15cm 程が遺存する。図示した Fig.12C-C' にみられるように SD23の上層に構築されていることから第2面の上層に一部残存した水田面の畦畔である。SX19付近は水口であったと考えられ、上層の砂層が切り込み、畦畔20が流失している。北側の3区では第2面の検出を追いかけたことによって畦畔20の水田面を掘り下げてしまっている。

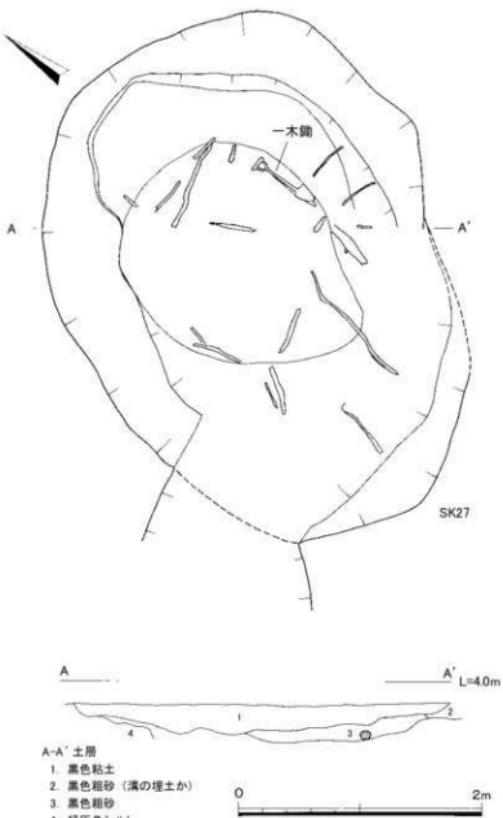


Fig. 14 SK27実測図 (1/40)

SX25 (Ph.15)

3区の北東隅で検出されたSD23下部の不整形の落ち込みである。一部の検出のため規模等について不明である。埋土は灰白色の砂層からなり、洪水によって攪拌されているものと考えられる。

出土遺物 Fig.15の8は須恵器壺の体部である。時期は古代に含まれる。

(3) 第3面の調査 (Fig.13)

水田遺構が検出されたのは3区のみであった。3区では溝1条、円形土壙1基が検出された。3区東際のSD23は第2面からの掘り込みが第3面まで達しているのが検出された。3区第3面は耕土は遺存せず、下部の砂混じりの黒灰砂質土となり、さらに下層は砂礫層となる。2区ではこの第3面は検出されず、下部の砂礫層に褐色砂礫の流路が蛇行しながら延長している流路104を検出した。

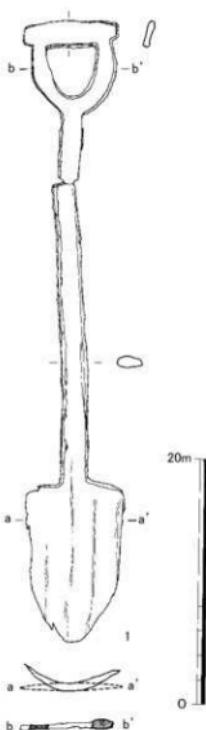


Fig. 15 SK27出土一木鉗 (1/4)



Ph. 3 SK27 出土一木鉗出土状況

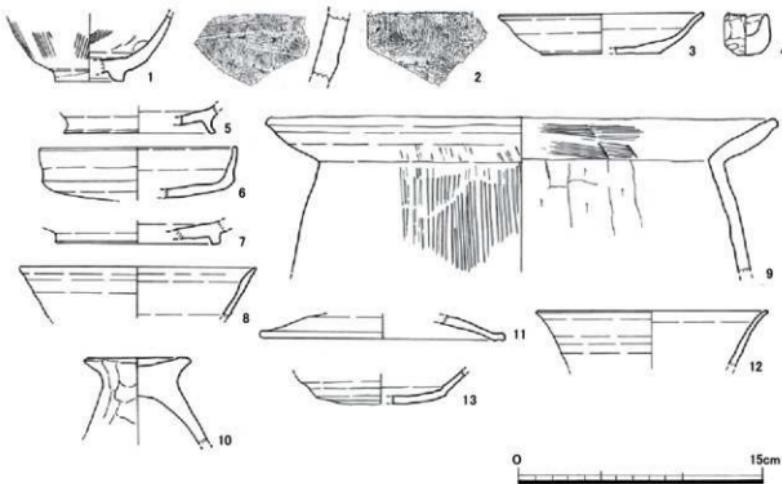


Fig. 16 出土遺物実測図 (1/3)

SD28 (Fig.13 Ph.17)

蛇行しながら略東西に延長し、円形土壙 SX27に接する。幅1.85m、深さ30cmを測る。埋土は上層が黒色、下層が灰色のいすれも粗砂である。南東際では下層に2区の流路104が延長しているとみられ、SD28の判別が難しく、不明瞭となる。(A-A' Ph.19)

SX27 (Fig.14 Ph.18)

長軸長430cm、短軸長325cmの楕円形プランを呈す。中央部で最深の36cmを測る。水路 SD28から導水し水口に設けた土壙の可能性がある。

下底に杭や流木とともに、一本鋤が出土した。時期は弥生後期から古墳前期におさまると思われる。類似した土壙に近世に「置賣」と呼ばれる土壙がある。市内では三筑遺跡（「三筑遺跡・次郎丸高石遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第69集 1981）で5世紀代、下月限C遺跡第7次（下月限C遺跡VI福岡市埋蔵文化財報告書第881集 2006 p-56）で8世紀代の水田遺構として検出されている。

出土遺物の一本鋤の1は完形で出土したが、保管のミスで乾燥し、歪んでいる。全長51.0cm、刃部長13.0cm、最大幅8.0cm 握手の長さ7.8cm、横木幅7.7cmを測る。刃部周縁は削いでいる。柾目取り。樹種は未鑑定。

(4) 第20次出土遺物 (Fig.15)

各遺物については報文中の遺構説明で既述したので、ここでは出土遺構と種類のみ再述する。1はSX04出土の同安窯系青磁、2はSX09出土陶器、3はSD11出土土師器壺、4はSD13出土手程土器、5はSD18出土土師器壺、6はSD21出土土師器壺、7はSD21出土須恵器壺、8はSD25出土須恵器壺、9はSD21出土土師器壺、10はSD22出土弥生土器蓋、11～13は2区2面検出時に出土し、11は須恵器壺口縁部、12は須恵器壺蓋、13は土師器壺である。



Ph. 4 1区第1面全景（北東から）



Ph. 5 1区第1面南東部土層（北東から）



Ph. 6 SD101 全景・土層（北東から）



Ph. 7 SK06 土層（南から）



Ph. 8 1区第2面全景（北東から）



Ph. 9 土堤12, SD11・16, 水田17（南東から）



Ph. 10 土堤12 北側壁面土層（東から）



Ph. 11 土堤12 南側壁面土層（西から）



Ph. 12 2区第2面全景（西から）



Ph. 13 畦畔20土層（G-G'北西から）



Ph. 14 3区第2面全景（南西から）



Ph. 15 SD22・23、SX25全景（南東から）



Ph. 16 2区第3面全景（北東から）



Ph. 17 3区第3面全景（南西から）



Ph. 18 SX27 木器出土状況（北から）



Ph. 19 3区第3面南東部壁面A-A'土層（西から）

IV おわりに

遺構面の時期と性格について

以下、調査を行った3面の遺構面について、留意点を記しておく。

第1面

時期は中世後半以降と考えられる。従って、近世、近代の遺構も検出される。

第2面

12世紀代のSD1IIは蛇行した旧河川流路（その一部がSD16）を利用して整備され、以後、幹線水路として現在まで継承しているものと考えられる。

下層のSD22・23は古代に遡る可能性があり、出土遺物からも雀居遺跡の9世紀代を中心とした水田遺構に相応している。この古代の水田遺構は特に本調査地点から北東側で検出が容易になるとを考えられる。

II-2、4で既述したように本調査地点は「博太庄」の近辺に位置する。日野氏が推定された条里地割（註1）によれば、七国三里三坪に位置し、高子内親王家庄に妨取されたとする六国三里卅四坪（平安遺文161号）の南側隣接地となることから関連が注意される。雀居遺跡、下月限C遺跡では古代、特に9世紀代の水田遺構が洪水砂に埋没し、遺存状態がよい。気象に起因するところが大きい（註2）と思うが、一帯の席田郡がII-4で記したように皇室、観世音寺などによって、新田開発、治水を進めたことも大きな要因と考えられる。その後、12世紀代になって、新たな莊園領主のもと開発、治水が行われ、SD1IIのような幹線水路も整備されたのであろう。

第3面

雀居遺跡で初めて検出された弥生後期～古墳の可能性がある水田遺構である。一部であるが、北側の低地では遺存が良くなると思われる。II-3で既述した空港内の集落遺構と対応してくる可能性がある。

註1) 2007日野尚志「下月限C遺跡を中心にして条里・河川について考える」『下月限C遺跡VII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第932集 p-255 第6図

註2) 2007日野尚志 前掲 p-253

報告書抄録

ふりがな	ささい12							
書名	雀居12							
副書名	雀居遺跡第20次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1360集							
編著者名	荒牧宏行							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2019年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
雀居遺跡	福岡県福岡市 博多区東那珂 2丁目641-3、 642-2、645-2	40132	2633	33° 34' 48"	130° 26' 40"	2017.08.18 ～2017.10.20	716m ²	自動車展示場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
雀居遺跡第20次	生産遺跡・ 水田跡	弥生～中世	水路、畦畔		弥生土器、須恵器、土師器、 陶磁器、曲物、一本鎬			
要約	御笠川の右岸冲積地に位置する。3面の遺構面が検出された。第1面では中世後半から近世以降、第2面は古代～中世、第3面は弥生後期～古墳時代と考えられる。第2面は12世紀代に旧河川流路を整備した幹線水路が検出され、現代まで継承されている。また、下面は8～9世紀代とみられる水路が検出された。第3面は雀居遺跡では初めての検出である。時期は古墳時代前期まで遡る可能性がある。水口の置賈状土壙から一本鎬の完形品が出土した。							

福岡空港整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

ささい 雀居 12

—雀居遺跡第20次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1360集

2019年（平成31年）3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目1番8号

印刷 (株)アドプリ
福岡市博多区山王2丁目5-27